

感染減少のまま、制限が解除、今後は、第6波は来る？

1 現状

日本 感染は減少したままで経過中、増加の傾向は少ないが、北海道、沖縄では感染増加の傾向がみられている
実効再生産数も微増

10月7日	10月14日	10月21日
0.67	0.68	0.74

外国 シンガポール(ワクチン接種 85%以上終了)

8月半ばに全面制限解除⇒感染激増、死者も増加⇒9月末再度生活制限

英国(ワクチン接種率 80%以上)

全面制限解除中⇒1日感染者数5万人以上、大半は軽症だが死者も増加
首相は with CORONA をかかけ経過中

米国(ワクチン接種率 ほぼ日本と同様だが週による差が大)

1月8日のピーク時の29%程度だが、1日の感染者数7万人以上
対策が週により異なるが国としては感染対策、ワクチン接種を呼びかけ

ロシア(ワクチン接種率30%、ワクチンへの信頼性がない)

感染者激増、政府は9日間の全面休業実施

現在は日本を含めワクチン接種が進み、感染対策を守ればどの国も感染が大きく減少する状況になっています。しかし、制限を全面解除すると感染が非常に増加しています。このことは個人感染防御策が重要であることを示しています。

感染者は軽症が大部分とされていますが、感染増加すれば死者も増加しています

2 今後どうなるでしょうか

その答えは今回の感染減少の原因と変異株の動向によります。

① ワクチン接種をさらにすすめること

13歳以上の2回接種

65歳以上、感染リスクのある人、医療従事者、高齢者施設従事者の3回目接種

② マスク着用、3密回避、対人距離の保持、宴会などの自粛、大規模イベントへの参加者抑制継続

- ③ 次の変異株の早期特定と発見が特定された場合は各個人が感染対策のレベルをあげることが重要

現在英国でデルタ・プラスという株が 6%を占めるようになっていますが、感染性や病原性は高くなっていません。日本でもデルタ株にアルファ株の性質をもったものが発見されていますが、感染性、病原性は高くないと考えられています。

これまでの 5 波では感染の主体となる株がすべて異なっているそうです。したがって第 6 波がくるとすれば新しい変異株が増加するか、ワクチン未接種者が感染対策をおこたったためにデルタ株のリバウンドが起こる、の 2 つの姿が予想されます。

新しい変異株としてはミュー株が問題となるかもしれませんが、現時点ではその傾向はありません。

専門家は第 6 波は必ず来ると予想しています。2 つの報道を参照してください。

3 現在までに世界で確認されたコロナウイルス株種

- ・従来型 武漢株、EU 株(武漢より流入) 全世界で著明に減少
- ・変異株

WHO、厚生労働省情報(2021 年 9 月 2 日現在)。

【懸念される変異株(VOC)】(名前、最初の検出時期と場所)

アルファ株(α) 2020 年 9 月 英国

ベータ株(β) 2020 年 5 月 南アフリカ

ガンマ株(γ) 2020 年 11 月 ブラジル

デルタ株(δ) 2020 年 10 月 インド

【注目すべき変異株(VOI)】

イータ株(η) 2020 年 12 月 北米、欧州の複数の国 日本で 18 件発見

イオタ株(ι) 2020 年 11 月 アメリカ

カッパ株(κ) 2020 年 10 月 インド 日本で 19 件発見

ラムダ株(λ) 2020 年 12 月 ペルー

ミュー株(μ) 2021 年 1 月 コロンビア 日本で 2 件発見

その他

デルタ・プラス 2021 年 9 月 英国

4 ワクチン、治療法

日本では国産のワクチンも来年度には使用可能のようです。3社が臨床試験に入っています。今までの mRNA 使用のワクチンではなく、ウイルスを弱毒化したインフルエンザと同様の製造方法によるものも作成されています。このタイプは従来と異なるためファイザー、モデルナ社製接種者に追加接種すると免疫効果が大きく増加するのではないかという期待も持たれています。3つのワクチン関連報道をご参照ください。

従来のワクチンもまだ使用可能な量が残っているようです。できるだけ早期に 80% を超える接種が望まれますが、12 歳以下については接種に疑問を投げかける意見が多く、リスクのある小児を除けば急ぐ必要はないというのが多くの考えですが 6 歳以上の児童に接種を開始する国もでてきます。

ワクチン接種は感染減少、重症化減少、死亡率低下に貢献することが確認されていますが、若年者や軽症者にも発生する後遺症にも有効とされています。関連の報道をご参照ください。

何よりも新型コロナ感染症はパンデミックを起こしています。日本だけの問題ではなく、アフリカ、南米をはじめ途上国は貧富の差が激しい国での接種が進むことが望まれます。その結果はじめて日常が戻るでしょう。

治療方法についてはいままでの対症療法に加え、中和抗体による悪化を積極的に止める方法が 2 種類使用可能となりました。

また経口服用可能な同様な薬剤が日本でも外国でも治験に入っています。早ければ年内にも結果がでて、早期に使用可能となるでしょう。しかし、抗インフルエンザ薬もそうであったように広く一般的に使用されると、予想外の副作用がみられることもあり要注意です。すでに他の疾患に使用されている薬を転用しようとする試みも進んでいます。

ワクチンによる感染・重症化・死亡の抑制、経口薬による治療と対インフルエンザに近い状態をつくる道筋が見えてきました。

しかし、何よりもいま重要なことは常に個人予防策を怠らないことです。政府も全面的に制限を解除するとしていますが、お酒を提供する飲食店では4名以内のグループを超えないよう注意しています。(文責 野見山)